

第1章 相模原市の概況

第1節 自然的・地理的環境

1. 位置

本市は東京都心から 30 km～70 km 圏内の神奈川県北西部に位置しています。南側で山北町、清川村、愛川町、厚木市、座間市、大和市に、北側で東京都（町田市、八王子市、^{ひのはら}檜原村）に、西側で山梨県（上野原市、^{どうし}道志村）に隣接しています。市域は東西 35.6 km、南北 22.0 km で、面積は 328.91 km² です。東京都心までのアクセス時間は、小田急小田原線で約 35 分（相模大野駅から新宿駅）、京王相模原線で約 40 分（橋本駅から新宿駅）、J R 中央本線で約 55 分（相模湖駅から新宿駅）です。自動車でのアクセス時間は約 1 時間 15 分（相模原市役所から新宿）です。

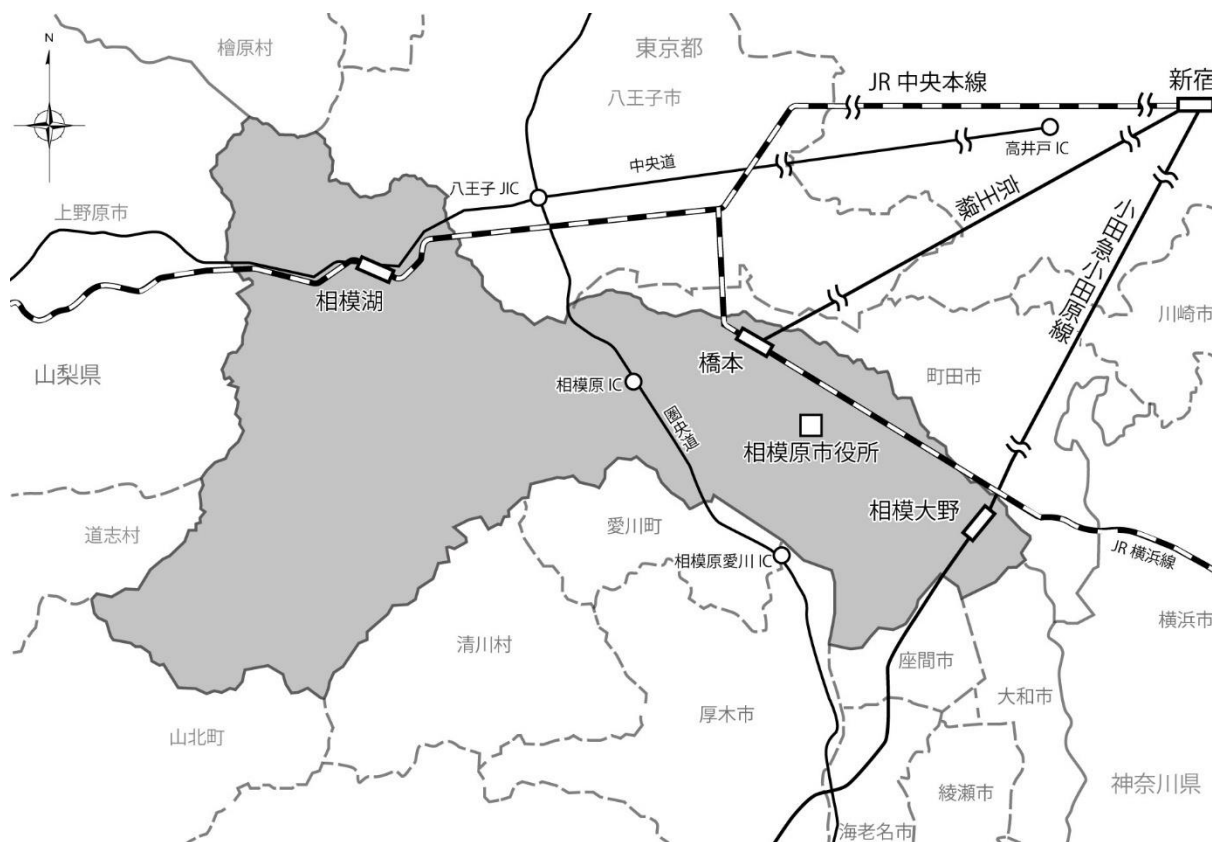
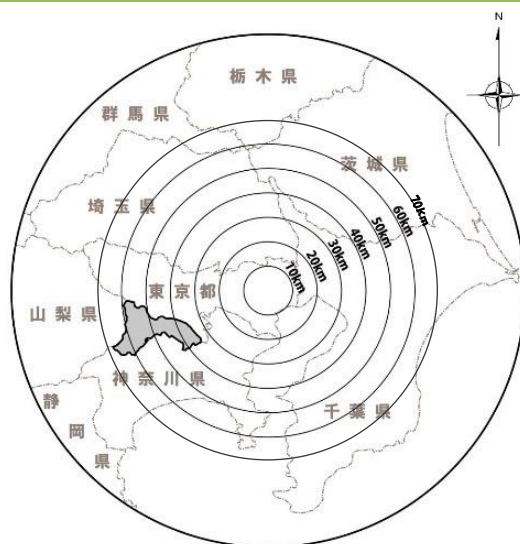


図 1-1 相模原市の位置と都心へのアクセス

2. 地形・地質

(1) 地 形

本市の地形は山地が広がる津久井地域と、台地が広がる相模原地域に大別できます。

津久井地域は丹沢大山^{じんば}国定公園や県立陣馬相模湖自然公園に指定されている山々が連なり、相模湖、津久井湖、宮ヶ瀬湖などの神奈川県^{じんば}の重要な水源を有します。山間に相模川、導志川などが流れ、河川に沿って河岸段丘が回廊状につながります。

相模原地域は多摩丘陵と相模川沿いの低地の間に相模野台地が広がっています。相模野台地は、相模川が何度も流れを変え、悠久の年月をかけ平地や急な崖を形成したことによってできた主に3つの段丘面からなり、高い方から相模原面、田名原面、陽原面と呼ばれ、ひな壇状の段丘地形になっています。また、川が形成した「河成段丘」の模式地として知られています。相模原段丘は、公共施設や商業施設など様々な都市機能が集積しています。相模川沿いの低地は、数千年にわたって相模川が氾濫することにより形成された土地であり、浸水想定区域が川沿いに所在しています。

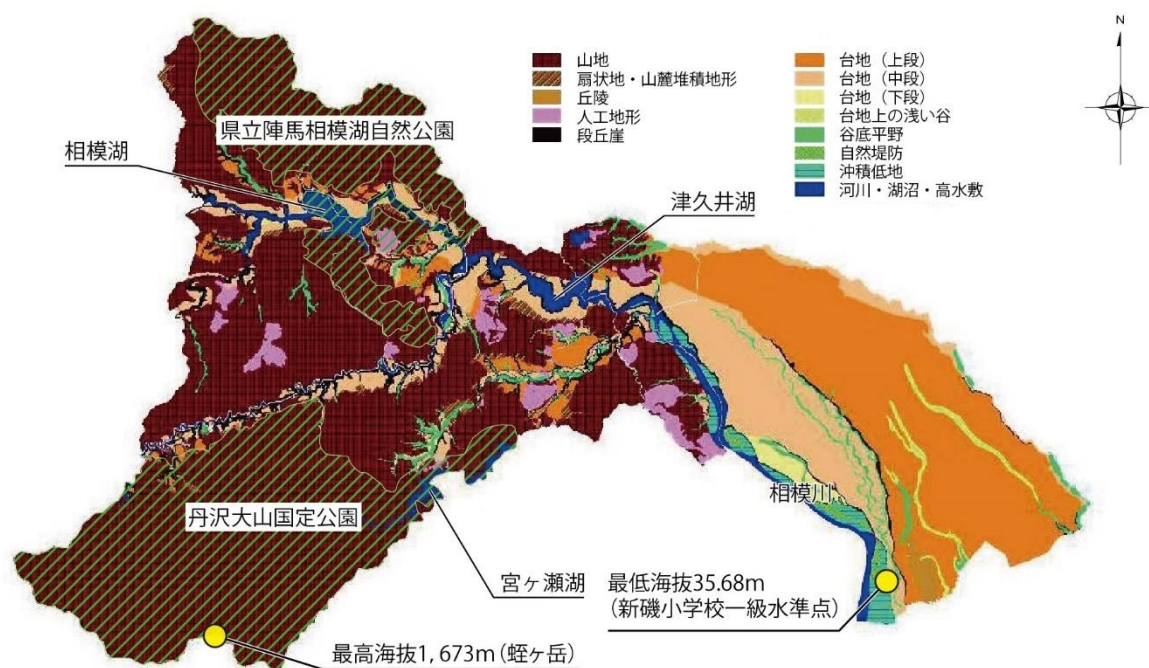


図 1-2 相模原市の地形分類 (『相模原市地域防災計画』に加筆)

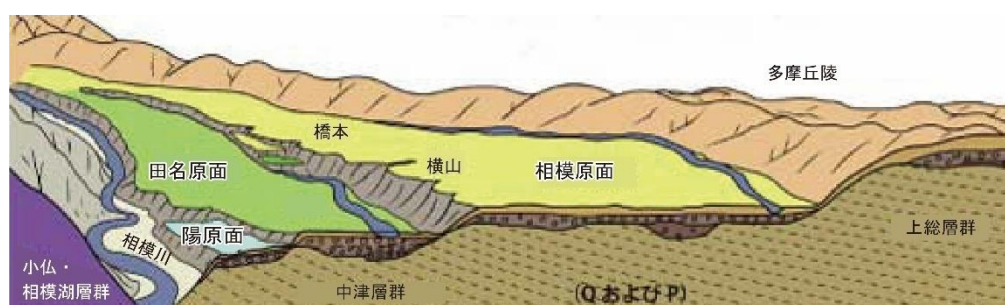


図 1-3 相模原地域の河岸段丘 (『相模原市史自然編』に加筆)

(2) 地 質

神奈川県北部は大陸プレートと海洋プレートの境界付近に位置し、その衝突過程を示す岩石が露出する、地質学的にみて重要な地域です。津久井地域は大きく四万十帯の関東山地と愛川層群・丹沢層群からなる丹沢山地に分かれています。津久井地域北側は関東山地の南端にあたり、小仏層群及び相模湖層群と呼ばれる、白亜紀から古第三紀（1億4,500万～2,300万年前）に海底に堆積した泥や砂、小石が固まってできた岩石と、それらが高い圧力と熱による変成作用を受けてできた岩石が分布する地域です。津久井地域南側は丹沢山地の北端にあたり、中～前期中新世（2,300万～1,200万年前）の火山岩や火砕岩（火山噴火によって火口から噴出された火山灰や岩石の破片などが堆積してできた岩石）及び深成岩（マグマが地下深くで固まってできた岩石）が分布しています。関東山地と丹沢山地の境である相模湖と宮ヶ瀬湖に挟まれた範囲は、谷間が帯状に広がる地域で、後期中新世～鮮新世（1,200万～260万年前）の比較的新しい地層から構成されています。

相模原地域の相模野台地は、かつての広大な相模川の扇状地に主に富士山を供給源とする、火山灰が降り積もって堆積した段丘堆積物からなります。関東ローム層や砂礫層等の段丘堆積物が覆った下にある、鮮新世末から早期更新世（300万～200万年前）に形成された中津層群と呼ばれる海成層を基盤としています。

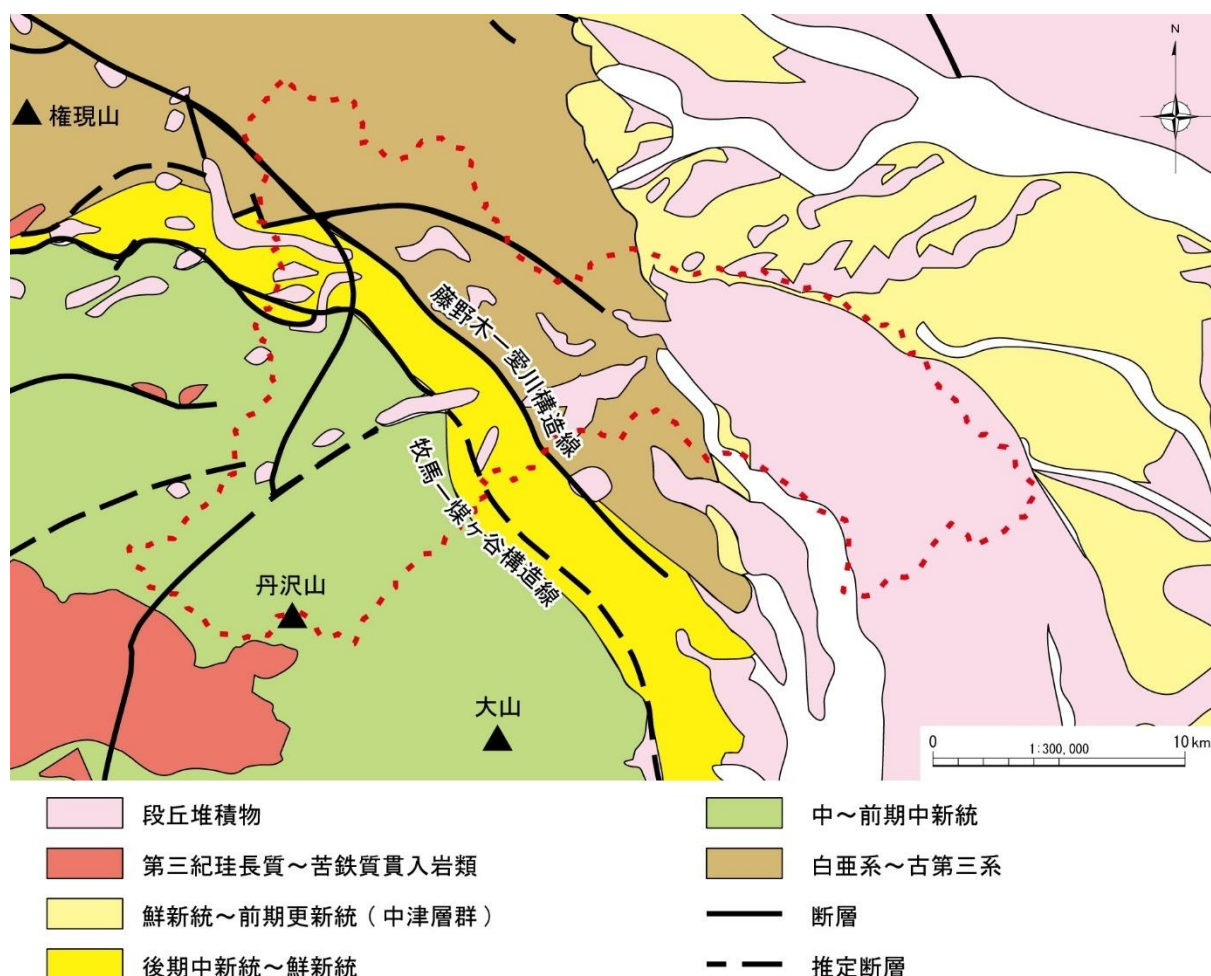


図 1-4 相模原市の地質（『相模原市史 自然編』関東山地・丹沢山地の地質図をもとに作成）

(3) 河川と湧水

本市の河川は、相模川水系と境川水系の2つの水系に分かれます。相模川の流域は山梨県と神奈川県にまたがります。流域内に相模川の本流とその支流である沢井川、秋山川、道志川、串川、早戸川、鳩川、姥川、道保川、八瀬川などがあります。境川の流域は、神奈川県と東京都にまたがります。支流に穴川、小松川があります。市内には5つの湖（奥相模湖、相模湖、津久井湖、宮ヶ瀬湖〔相模川水系〕、城山湖〔境川水系〕）と、6つのダム（道志ダム・相模ダム・沼本ダム・城山ダム・宮ヶ瀬ダム〔相模川水系〕、本沢ダム〔境川水系〕）があります。相模川水系は神奈川県の水需要の6割を担う重要な水源です。

相模野台地の段丘崖下に多くの湧水が確認できます。湧水やその周辺に、きれいな水を好む水生昆虫や魚、湿性の植物が生息しています。緑区大島から田名の一部にかけては、湧水地点を石積で囲った水溜め施設がつくられています。地域では「ヤツボ」と呼ばれており、大島水場のヤツボなどが市登録史跡に登録されています。その他、特徴的な地下水として宙水みずばが点在して沼地や窪地がつけられたことにより、でいらぼっちちゅうみず伝説伝承地として登録されています。



図 1-5 相模川と境川の水系（『第2次相模原市水と緑の基本計画・生物多様性戦略』より）

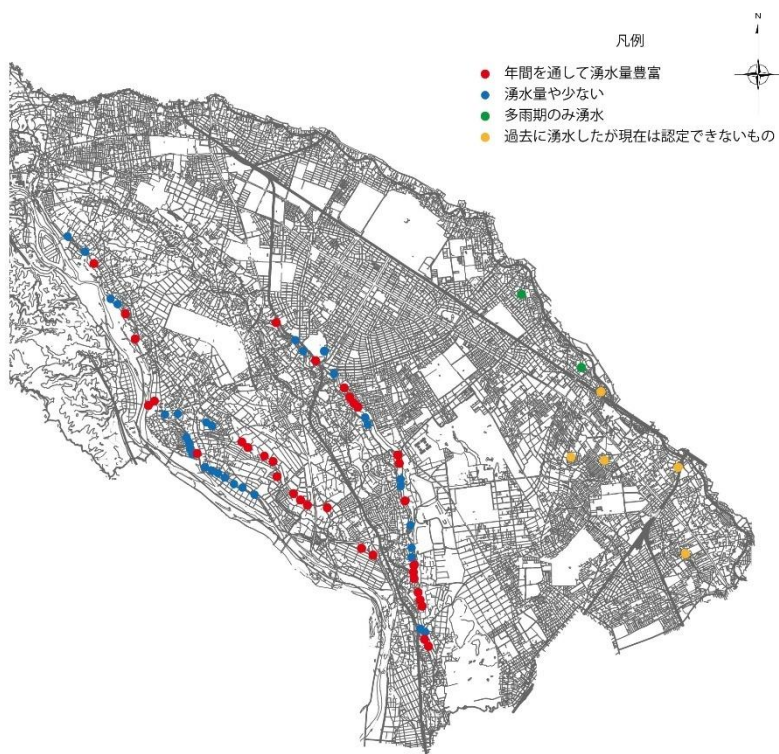


図1-6 湧水分布図（『相模原市史 自然編』相模原における湧泉の分布図をもとに作成）

3. 気 候

本市の気温は、日中の寒暖差が大きくなり、過ごしやすいです。年間を通して、気温が最も低い月が1月、最も高い月が8月で、本市は気候の特徴から、山間部である津久井地域と台地部である相模原地域に大きく分けられます。

年間平均気温は、相模原地域より津久井地域が2℃程低くなっています。年間の最高気温、最低気温は、ともに相模原地域より津久井地域が下回ります。

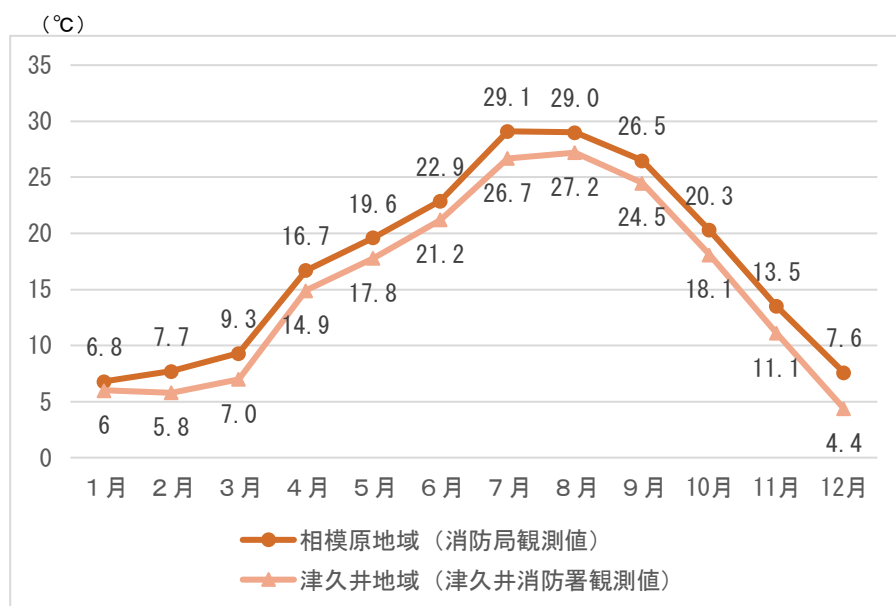


図1-7 月別平均気温（『令和6年版統計書』より）

本市の降水量は、太平洋側に位置して台風の影響を受けるため、8月が最も多くなります。本市の令和6（2024）年の年間降水量は、相模原地域が2144.0mm、津久井地域が1622.0mmで、太平洋沿岸部に近い相模原地域が520mm以上多くなっています。

平成元（1989）年以降、平均気温や1時間最大雨量は増加傾向にあります。

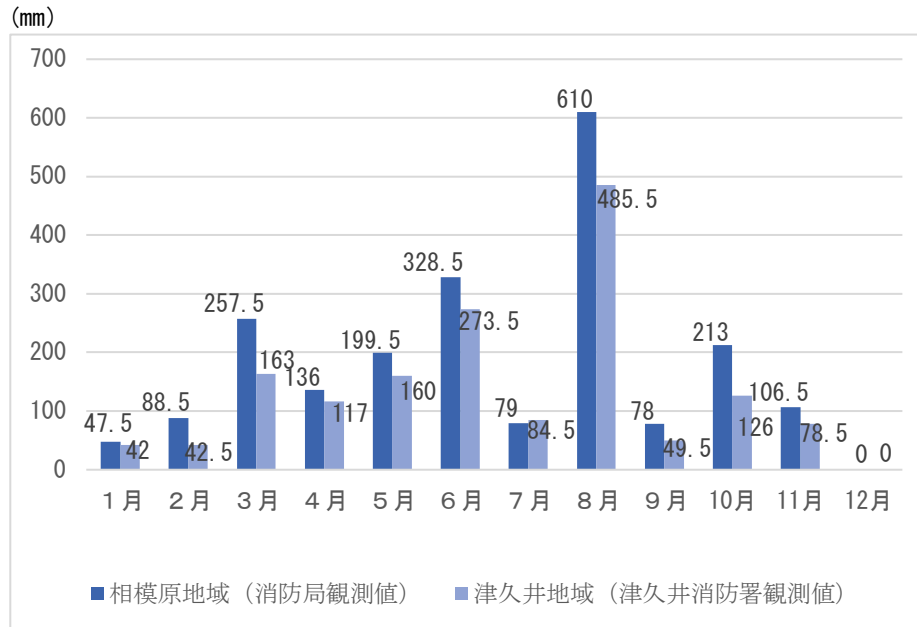


図 1-8 月別降水量（『令和6年版統計書』より）

4. 生態系

（1）植 生

本市の植生は自然林地域、森林地域、里山地域に大別できます（図 1-9）。自然林地域は標高の高い地域でブナ等を主な植生に持ち、森林地域はスギ、ヒノキ、クヌギ、コナラを中心とした人工林を主な植生に持ち、里山地域はクヌギやコナラ等が主な植生で、雑木林や耕作地を含む地域を示します。

自然林地域、森林地域の大半が分布する津久井地域の中でも、丹沢大山国定公園がある標高 1,200～1,500mの地域は、自然林地域に区分され、ブナ林やミズナラ林が広がっています。標高約 1,200m以下の地域は、スギ、ヒノキ、クヌギ、コナラが分布する森林地域に区分されています。

津久井地域の中山間地から相模原地域にかけての里山地域には、クヌギやコナラなどの落葉広葉樹林からなる雑木林が広がっています。里山地域では、集落周辺の耕作地や水路などと一体となった里山の環境が見られます。

平坦な地形が広がる相模原地域は、水田や畑が広がるほか、本市の特徴的な地形である3段の段丘の斜面に連なるように斜面樹林（クヌギ、コナラ等）が広がっています。また、相模野台地の内陸側を中心に雑木林が残されています。

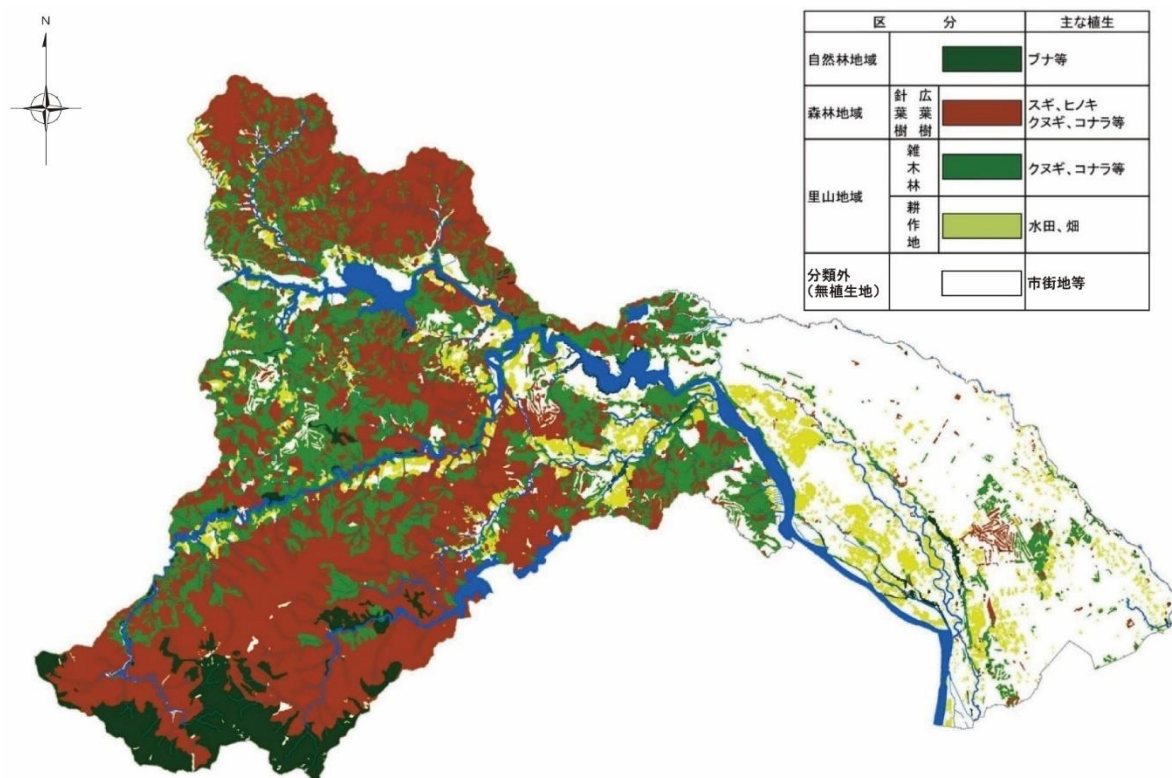


図 1-9 相模原市の植生

(『第2次相模原市水と緑の基本計画・生物多様性戦略』を一部改変)

(2) 動植物

本市は東西で異なる自然環境を有するため、山地性の動植物と平地性の動植物が存在することが特徴です。市内で確認・記録されている全10分類(植物、哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、魚類、底生生物・軟体生物、昆虫類、クモ類及び菌類)の総種数は約1万種です。確認種類は、昆虫類(6,142種)や植物(2,838種)が多く確認されています。

その内希少種は、植物244種、哺乳類22種、鳥類115種、両生類10種、爬虫類7種、魚類46種、底生生物・軟体動物17種、昆虫類231種、クモ類3種です。動物の希少種は、津久井地域や相模川、津久井湖などの水辺環境で確認種が多い傾向にあります。植物の希少種は、相模原地域の相模川周辺に多い傾向があります。本市では、カモシカやミヤコタナゴ、ヤマネなどが国指定天然記念物に、諏訪神社の大杉や石楯尾神社の二本杉と社叢^{しゃそう}、藤野のカタクリ自生地、ギフチョウ、キマダラルリツバメなどが県指定天然記念物に、勝坂のホトケドジョウや照葉樹林が市登録天然記念物に登録されるなど、13の動植物が指定又は登録を受けています。

第2節 社会的環境

1. 沿革

市名である「相模原」という地名は、旧国名である「相模国」にちなみます。室町時代に、広大な相模野台地の原野は地域によって「溝原」^{みぞはら}、「淵辺原」^{ふちべはら}、「矢部原」^{やべはら}、「田名野」^{たなの}と呼ばれ、「原」や「野」で表されていました。「相模」の「原」は、明治時代初頭からは県北地域を指して「相模原」と呼ばれます。現在の「相模原市」に至る沿革は以下のとおりです。

奈良時代の律令制度に基づく古代国家において、横浜・川崎市域を除く神奈川県内は相模国に含まれ、相模原地域は高座郡の一部、津久井地域は愛甲郡の一部でした。武家が台頭する中世社会において、津久井地域は「奥三保」^{おくさんぼう}と呼ばれ、豊かな山林資源を抱えて、鎌倉北条氏に重視されました。戦国大名小田原北条氏の支配の頃は、相模原地域は玉縄城（鎌倉市）を本拠とする東郡^{ひがしのこおり}の一部、津久井地域は津久井城を本拠とする津久井領でした。江戸時代の徳川政権下において、相模川と境川に挟まれた相模野台地から海岸までが高座郡とされ、相模原地域に17か村、津久井地域は「津久井県」と呼ばれて27か村2宿で構成されました。このように、古代以降の相模原地域と津久井地域は、川と台地と山からなる地形によって異なる支配体制のもと、歴史が紡がれていきました。

江戸時代の幕藩体制が終わり、明治政権へと移り変わると、明治22（1889）年の町村制施行に伴い、現在の相模原市域に32か村が誕生しました。その内、青山村、根小屋村^{ねごや}、長竹村^{ながたけ}が明治42（1909）年に合併し、串川村となりました。大正2（1913）年に与瀬駅と吉野駅が町制を施行し、与瀬町と吉野町が発足しました。大正15（1926）年に中野村、太井村、又野村、三ヶ木村が合併し中野町が誕生し、溝村が町制を施行し上溝町が誕生しました。座間村は昭和12（1937）年に町制を施行し座間町となり、昭和16（1941）年に座間町、上溝町、新磯村^{あらいそ}、麻溝村^{あさみぞ}、田名村、大沢村、相原村、大野村は合併し相模原町となり（座間町は昭和23（1948）年に分立）、昭和29（1954）年に市制を施行し相模原市が誕生しました。同年に、小淵村^{おぶち}と沢井村が吉野町と合併しました。昭和30（1955）年に川尻村^{かわしり}、湘南村^{しょうなん}、三沢村（中沢地区）が合併し城山町が、中野村、串川村、鳥屋村、青野原村^{あおのはら}、青根村、三沢村（三井地区）^{みい}が合併し津久井町が、与瀬町、小原村^{おばら}、内郷村^{うちごう}、千木良村^{ちぎら}が合併し相模湖町が、吉野町、日連村^{ひづれ}、名倉村^{なぐら}、牧野村^{まぎの}、佐野川村が合併し藤野町^{ふじの}が誕生しました。そして、平成18（2006）年に相模原市が旧津久井町及び旧相模湖町と合併し、平成19（2007）年に旧城山町及び旧藤野町と合併したことで、現在の相模原市になりました。相模原市は平成22（2010）年に、戦後に成立した市として初めての指定都市となり、緑区、中央区、南区の3区からなる区制を施行しています。

第1章 相模原市の概況

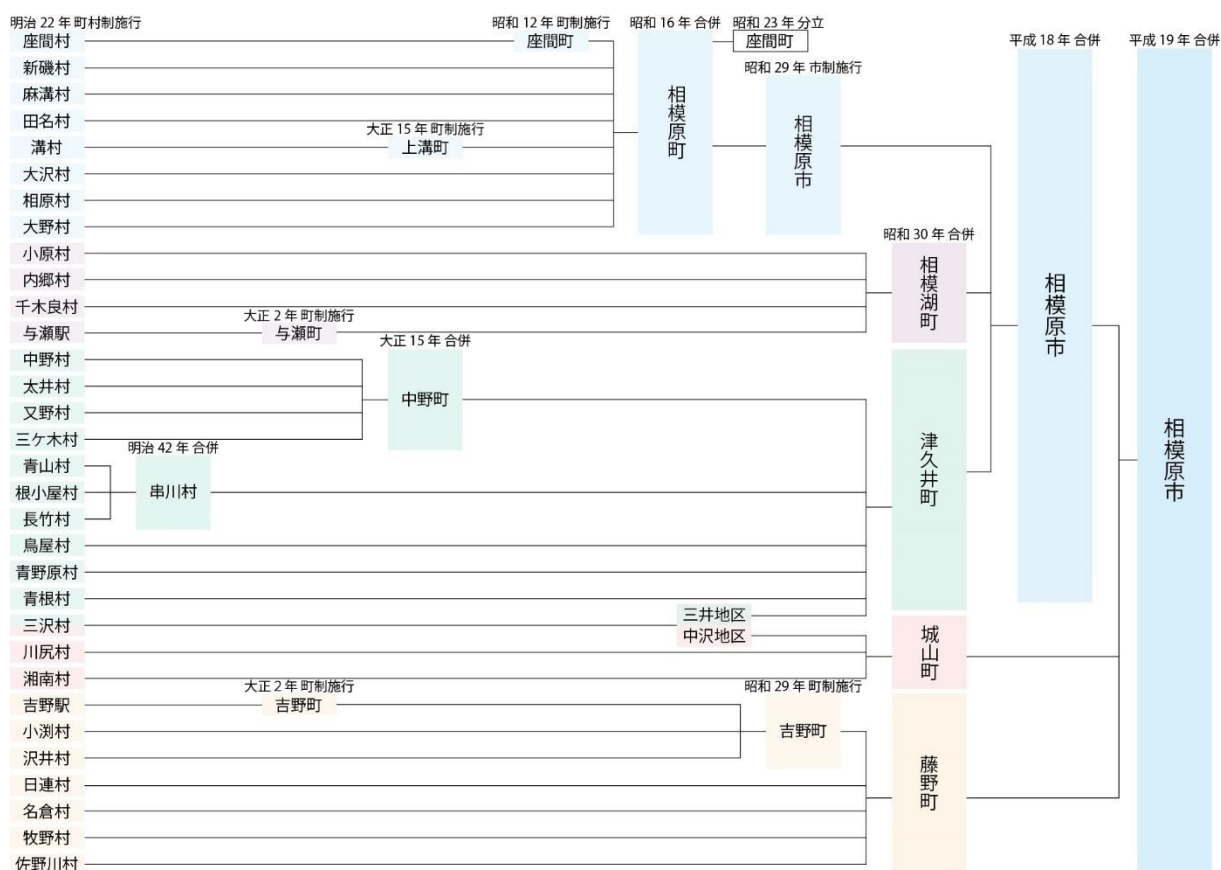


図 1-10 相模原市の町村合併の経緯

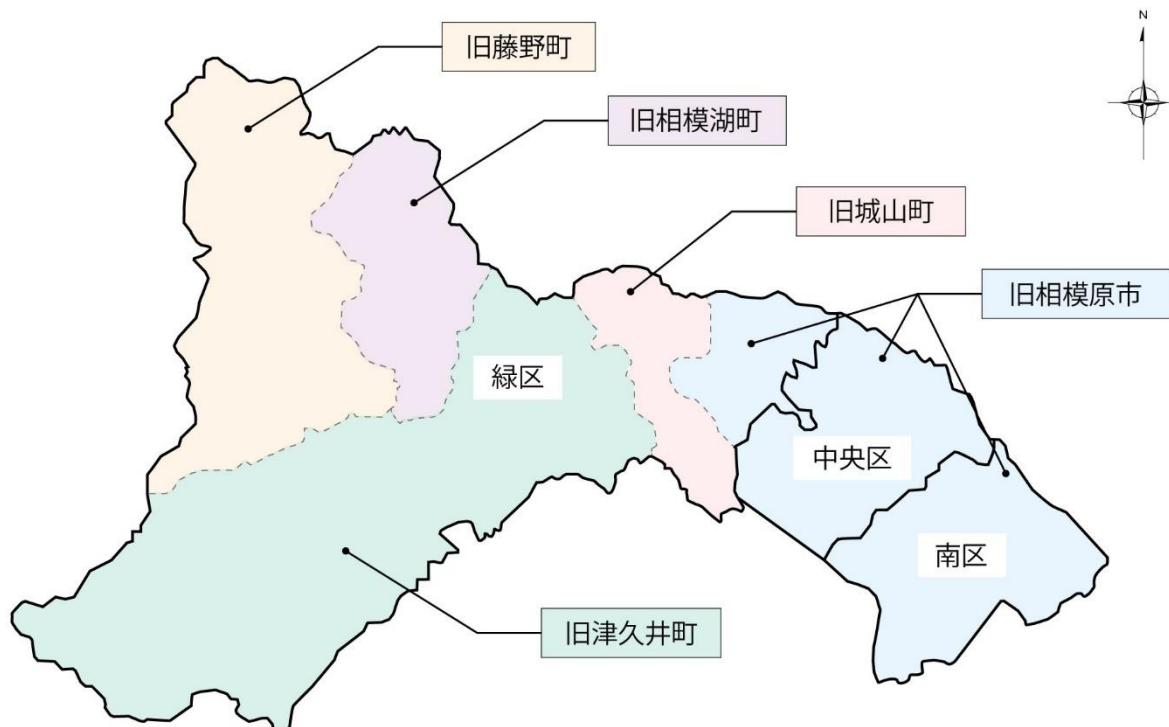


図 1-11 相模原市の現在の区割りと旧町境

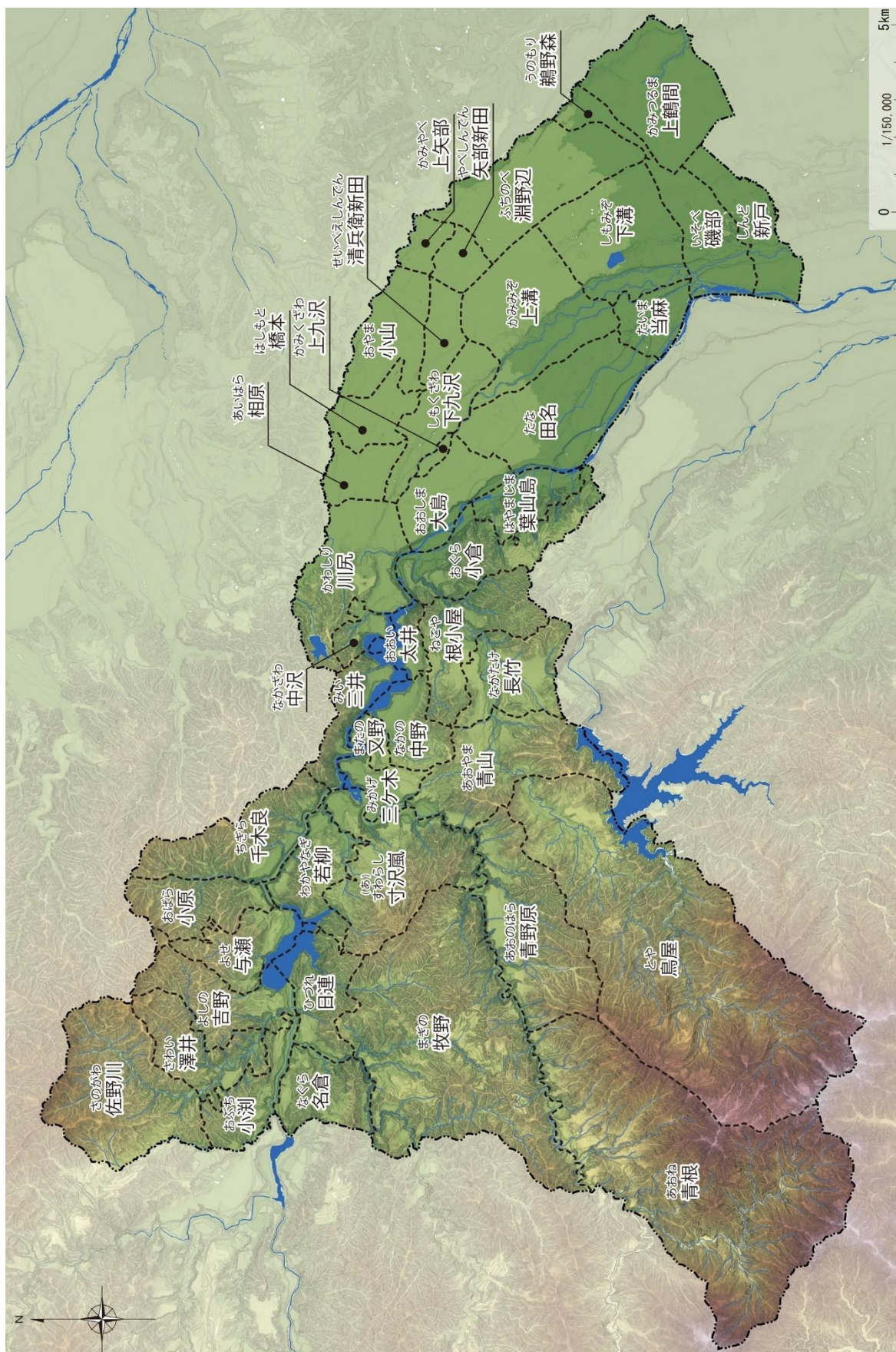


図 1-12 相模原市の地区名（近世村落の地区名・範囲で作成）

2. 人 口

本市の人口は、令和7年（2025）8月現在721,981人です。平成18（2006）年及び平成19（2007）年の合併により、総人口70万人を超える大都市となり、その後も人口は微増傾向で推移してきました。令和5（2023）年の本市の人口は724,987人でした。地区別では緑区が167,451人、中央区が274,480人、南区が283,056人であり、中央区、南区に人口が集中しています。

令和2（2020）年の国勢調査に基づく本市の将来人口推計結果によると、本市の総人口は令和7（2025）年の728,042人をピークとして、それ以降は減少すると見込まれています。中位ケースの場合は、2040年には701,773人、2070年には568,161人、高位ケースの場合は、2040年には716,994人、2070年には609,914人になると予想されます。本市としては、高位ケースの推移が望まれます。

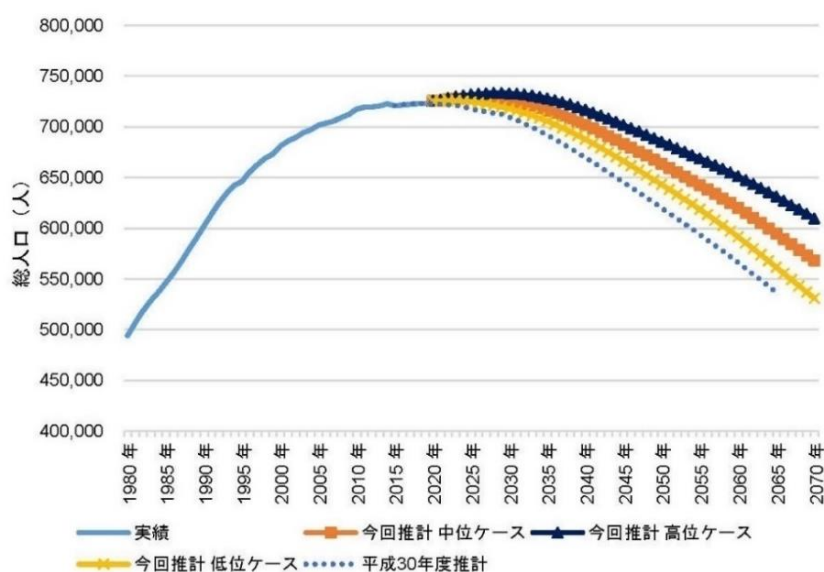


図1-13 総人口の推移と将来人口推計（『令和2年国勢調査人口等基本集計結果』より）

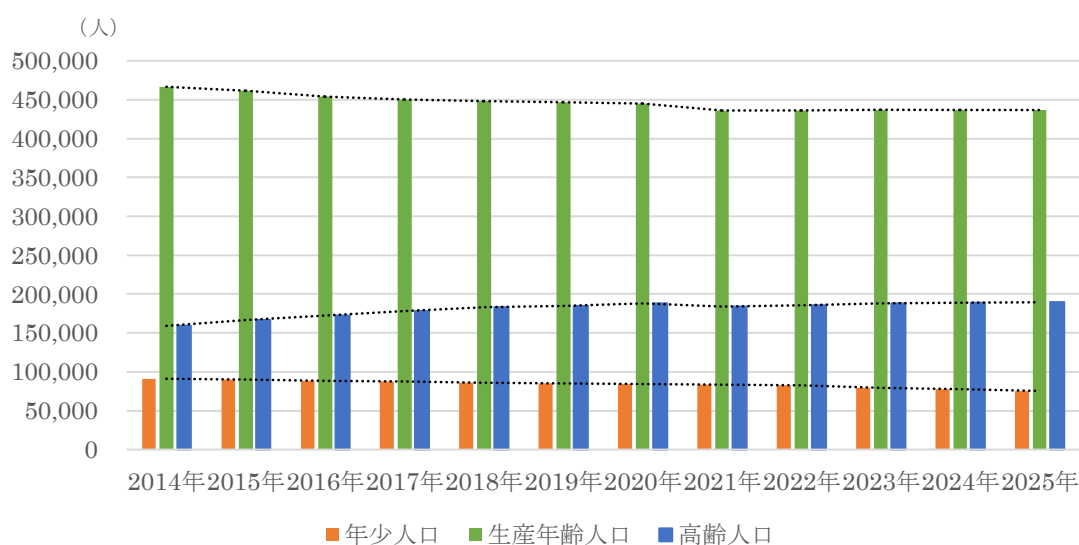


図1-14 相模原市の年齢別人口の推移（『相模原市 人口と世帯数の推移』より）

年齢区分別に見ると、年少人口及び生産年齢人口は今後も一貫して減少し、高齢者人口は令和28(2046)年まで増加すると推計されており、将来的にはさらに少子高齢化が進むと予測されています。

3. 産 業

本市の事業所数は、令和3(2021)年の経済センサスによると22,055事業所で、産業別の構成比は第1次産業が0.3%、第2次産業が20.1%、第3次産業が79.6%でした。令和3(2021)年の総産業別従業者数は263,504人で、構成比は第1次産業が0.3%、第2次産業が20.6%、第3次産業が79.1%でした。事業所数と従業者数の8割を第3次産業が占めていますが、第1次産業の割合は1%未満で、担い手の高齢化、若い世代の後継者を増やすことが課題となっています。



図 1-15 津久井の組紐

津久井地域の組紐は、第2次産業における本市の特産品の一つとして挙げられます。組紐は数本から数十本の糸を一定の方式で交差させて組み上げていく紐の総称で、津久井の鳥屋や中野では大正時代末期～昭和初期以降からの伝統があり、「くみひもの里」としてブランド力を上げています。

また、第1次産業は、津久井地域で作られてきた「津久井在来大豆」が特産品にあげられます。「津久井在来大豆」は、煮豆や味噌加工等、古くから郷土食の素材として地域で栽培されてきたものです。一時、栽培者が減り、「幻の大豆」と呼ばれましたが、近年は地産地消の取組や食文化への関心から再び注目され、少しずつ栽培も広がってきています。

本市の歴史文化との関わりにおいては、旧津久井町内の特産品を津久井城の歴史と絡めて「津久井城ブランド」とした商品のほか、市内の和菓子店・洋菓子店では様々な伝承や文化財などに因んだ菓子製品がつくられています。

4. 土地利用

令和7(2025)年1月1日時点の市域は、328.91km²、宅地48.61km²(14.8%)、農地18.93km²(5.7%)、山林202.89km²(61.7%)、原野4.14km²(1.3%)、雑種地18.26km²(5.5%)、その他36.08km²(11.0%)です。

6割を超える山林の多くが津久井地域に占め、他に田・畑や河川・湖など大半が自然的土地利用です。相模原地域は住宅用地や商業用地などの都市的土地利用が主体で、住宅用地の占める割合が高くなっています。

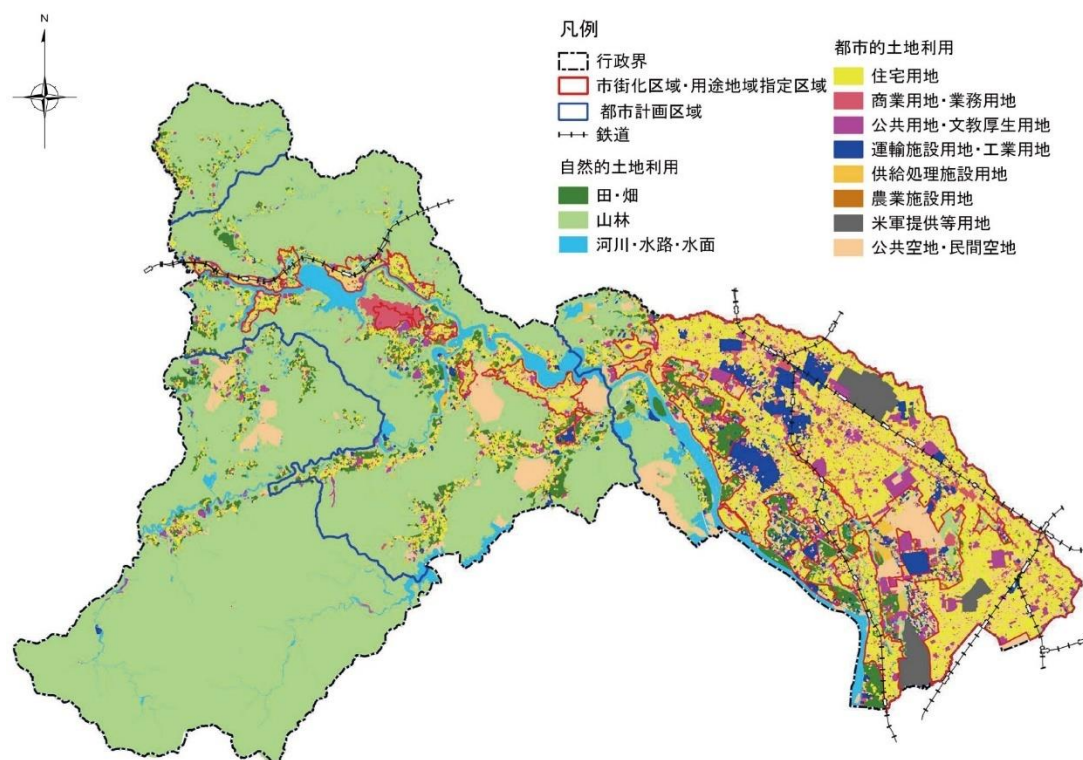


図1-16 相模原市の土地利用状況（『都市計画マスタープラン』より）

5. 交通機関

市内には中央自動車道（中央道）と首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の自動車専用道路（高速道路）2路線と、国道16号、国道20号、国道129号、国道412号、国道413号の一般国道5路線が整備されており、広域的な基幹道路として機能しています。鉄道はJ R横浜線、J R相模線、J R中央本線、小田急小田原線、小田急江ノ島線及び、京王相模原線の6路線があり、本市と東京方面や横浜方面などを結んでいます。市外からの来訪者はこれらの交通機関を利用して本市に入ります。また、リニア中央新幹線の建設計画は本市域を横断し、神奈川県駅（仮称）の建設が橋本駅の南口で行われており、開業以降は市域への鉄道の影響が増すと考えられます。

その他、市街地の市内交通では民間バスの路線網が張り巡らされており、本市のコミュニティバス「せせらぎ号」が交通不便地区における高齢者等移動制約者の生活交通を確保するため、橋本-大島間で運行しています。また、津久井地域の高齢者の団体向けに、「介護予防事業送迎けんこう号」が無料で利用できる他、バス事業者より撤退の申出があった路線を公費負担で維持する、「生活交通維持確保路線」も運行しています。

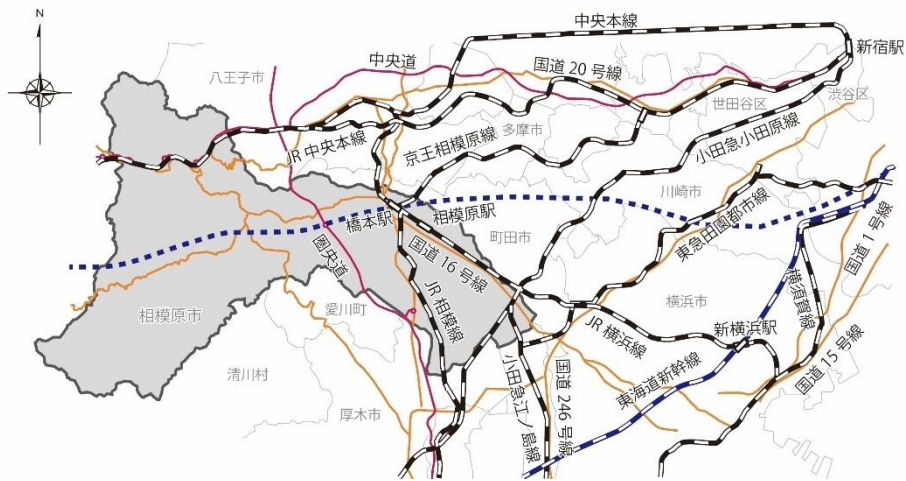


図 1-17 相模原市周辺の広域主要交通網

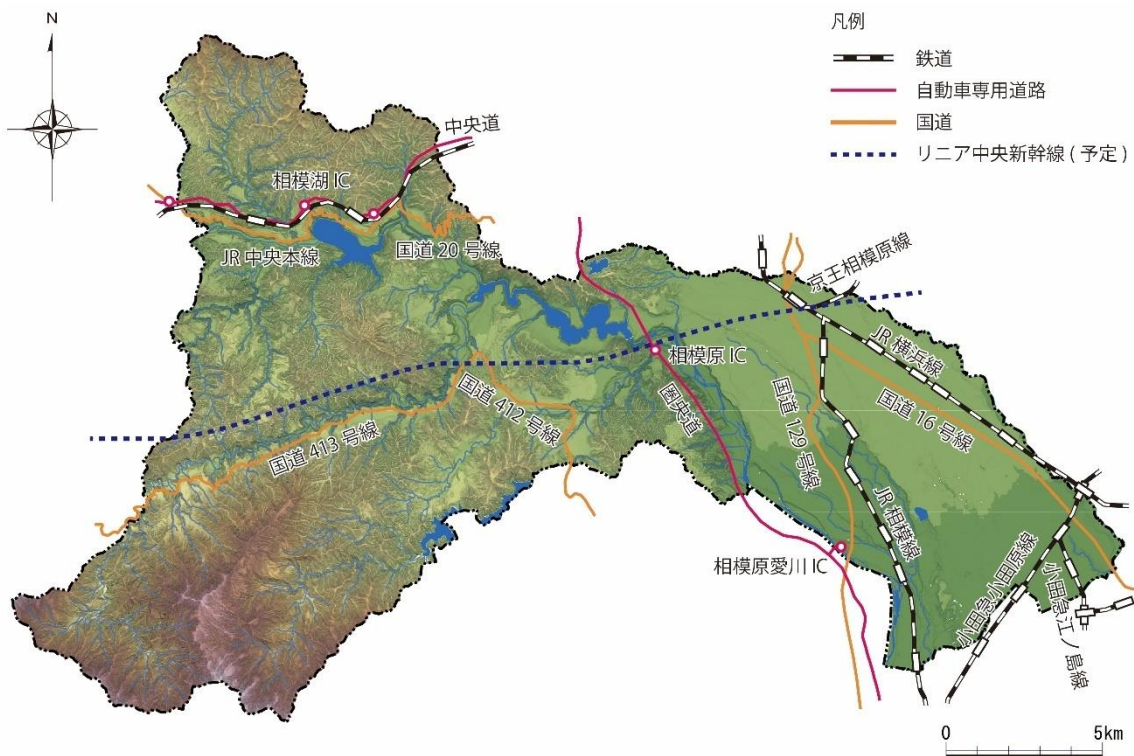


図 1-18 相模原市の主要交通網

6. 観 光

本市の入込観光客数（日帰り客と宿泊客の合計値）は1千万人から1千4百万人で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和2（2020）年に516万3千人に減少しました。その後は回復傾向にあり、令和6（2024）年の観光客数は949万5千人でした。

令和6（2024）年の観光客数を主要な観光地点、観光施設、観光行事別に見ると、相模原麻溝公園が最も多く、112万2千人が訪れました。本市の主要観光施設の中で、豊かな自然が観光客をひきつけていることがわかります。

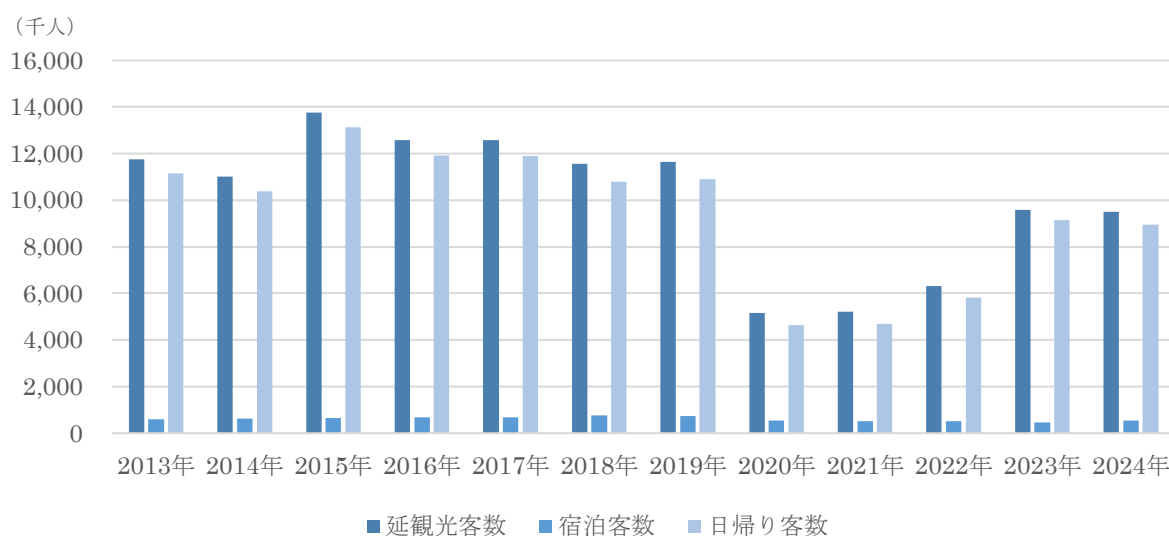


図 1-19 入込観光客数の推移（『神奈川県令和6年入込観光客調査』より）

表 1-1 主要な観光地点、観光施設、観光行事と観光客数

（『神奈川県令和6年入込観光客調査』より）

名 称	観光客数(千人)
相模原麻溝公園	1,122
総合体育館	398
相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら	214
相模原ギオンスタジアム・相模原ギオンフィールド	284
津久井湖観光センター	71
藤野駅	327
大野北銀河祭り	150
北総合体育館	252

7. 文化財関連施設

本市には展示施設、公開施設、図書館の文化財関連施設があります。展示施設のうち、相模原市立博物館は人文・自然・天文の総合博物館で、各分野の学芸員が在籍し、資料の収集・保存、調査・研究、展示・教育普及の博物館事業を実施しています。公開施設は小原宿本陣等の建造物や復元整備された遺跡公園があります。図書館は南区・中央区・緑区の3区に設置されており、蔵書から郷土の歴史や文化、自然を調べることができます。



図 1-20 文化財関連施設位置図

表 1-2 文化財関連施設一覧（令和 7（2025）年時点）

区分	名称	所在地	施設概要
展示施設	相模原市立博物館	中央区高根 3-1-15	人文・自然・天文の総合博物館
	麻布大学いのちの博物館	中央区淵野辺 1-17-71	動物標本等を展示した獣医学系の大学博物館
	女子美アートミュージアム	南区麻溝台 1900	女子美術大学の美術館
	相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら	中央区水郷田名 1-5-1	天然記念物の飼育展示を含む相模川の淡水魚等の水族館
	相模田名民家資料館	中央区田名 4856-2	近現代の田名地域の養蚕や生活を伝える古民家の資料館
	相模の大風センター（れんげの里あいそ内）	南区新戸 2268-1	市無形民俗文化財で相模の大風文化を伝える資料館

第1章 相模原市の概況

区分	名称	所在地	施設概要
展示施設	史跡田名向原遺跡旧石器時代学習館（旧石器ハテナ館）	中央区田名塩田 3 丁目 23 番 11 号	国指定史跡田名向原遺跡のガイダンス施設
	小原の郷	緑区小原 711-2	小原宿のガイダンス施設
	吉野宿ふじや	緑区吉野 214	市登録有形文化財で吉野宿の旅籠の名残を留める古民家の資料館
	尾崎罌堂記念館	緑区又野 691	「憲政の神」といわれた尾崎行雄生誕地である尾崎家屋敷跡に建設された資料館
	相模湖記念館	緑区与瀬 259-1（県立相模湖交流センター内）	戦後国内初の相模ダム建設の歴史を伝える資料館
	県立相模原公園（植物園（グリーンハウス））	南区下溝 3277 番地	県立公園内の植物園
	県立津久井湖城山公園（津久井城跡）	緑区根小屋 162	津久井城跡の歴史と自然を保全した県立公園
	津久井湖記念館	緑区城山 2-9-5	城山ダム建設の歴史を伝える資料館
公開施設	旧中村家住宅	南区磯部 1734-1	国登録有形文化財の古民家
	相模原市古民家園 旧青柳寺庫裡	緑区大島 3853-8（相模川自然の村公園内）	県指定重要文化財の古民家
	小原宿本陣	緑区小原 698-1	県指定重要文化財の本陣建物
	道保川公園	中央区上溝 1359	相模野台地の段丘崖下に分布する湧水とワサビ田跡
	鹿沼公園	中央区鹿沼台 2-15-1	市登録史跡でいらぼっち伝説伝承地
	史跡勝坂遺跡公園	南区磯部 1780 ほか	国指定史跡勝坂遺跡の縄文時代の復元整備
	田名向原遺跡公園	中央区田名塩田 3-313-3	国指定史跡田名向原遺跡の旧石器時代等の復元整備
	川尻石器時代遺跡	緑区谷ヶ原 2 丁目 788-2 ほか	国指定史跡川尻石器時代遺跡の敷石住居跡の露出展示
	寸沢嵐石器時代遺跡	緑区寸沢嵐 568-2 ほか	国指定史跡寸沢嵐石器時代遺跡の敷石住居跡の露出展示
	当麻東原公園	南区当麻 840	市指定史跡当麻東原古墳の復元整備
図書館	相模原市立図書館	中央区鹿沼台 2-13-1	郷土誌等の蔵書、貸出、閲覧
	相模大野図書館	南区相模大野 4-4-1	郷土誌等の蔵書、貸出、閲覧
	橋本図書館	緑区橋本 3-28-1 ミウヰ橋本 6 階	郷土誌等の蔵書、貸出、閲覧
	図書館相武台分館	南区新磯野 4-8-7	郷土誌等の蔵書、貸出、閲覧

第3節 歴史的環境

丹沢・関東山地を擁する津久井地域、河成段丘である相模野台地が広がる相模原地域、この対極的な地形に相模川などの河川が貫流します。こうした河川沿いの台地の人々が住みはじめ、旧石器時代以来の歴史舞台となり、多様な歴史文化を形成してきました。市内の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）は河川沿いに 540 か所以上認められます。近世以降に甲州街道などの街道整備や広大な相模野台地で新田開発（耕作地）など大規模な土地の開発が行われ、近代の軍都計画により都市整備が進みました。相模原地域と津久井地域は、古代以来の歴史的な背景も異なるため、その特性を踏まえた歴史の変遷を概説します。

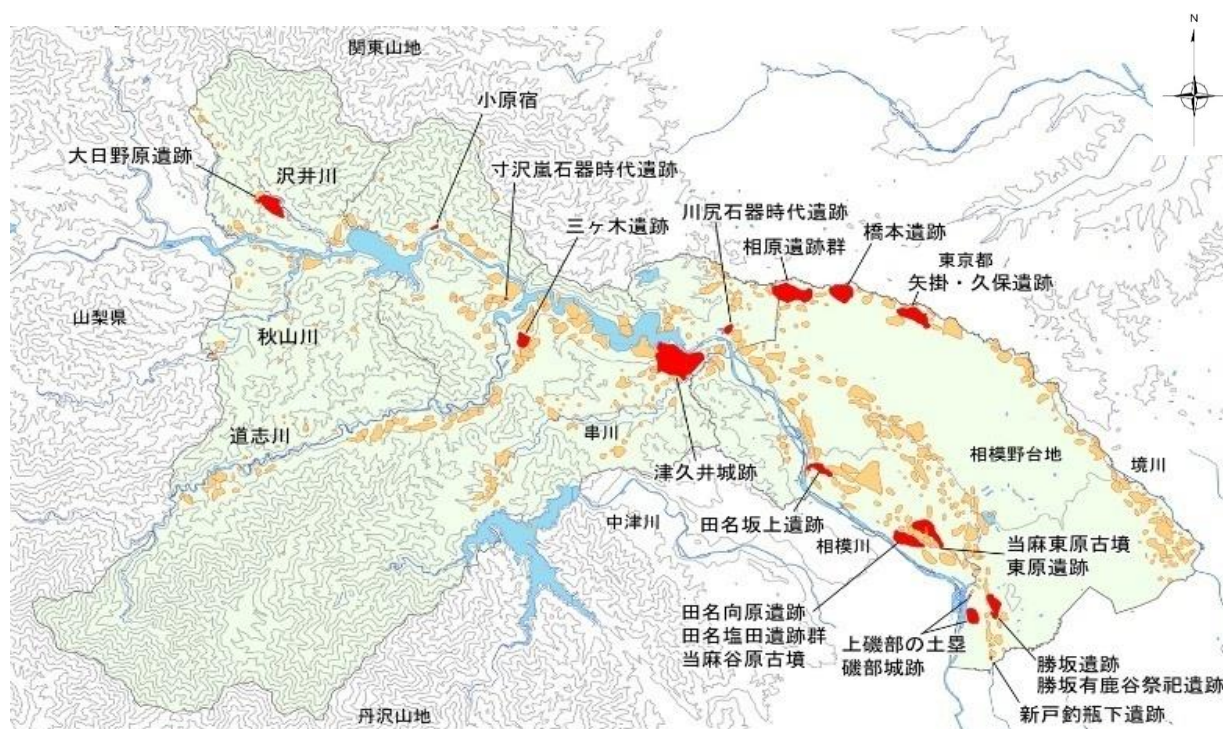


図 1-21 遺跡分布図

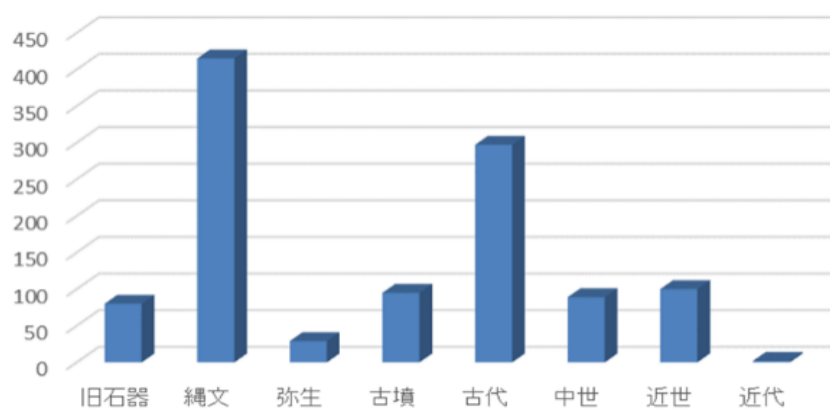


図 1-22 時代別遺跡数

1. 先史時代(旧石器時代～弥生時代)

大陸から移動して日本列島に人々が住み始めたのは、旧石器時代の38,000年前以降でした。地球規模の寒冷な氷期で、本市域は寒冷乾燥により針葉樹と広葉樹が混交した疎林と草原が広がり、相模川は今よりも深い谷を刻んで流れていました。現在とは全く異なる自然環境、景観が広がっていた時代です。

津久井城跡馬込地区は、旧石器時代前半期(34,000年前)の市内最古級の遺跡です。相模川と串川が合



図 1-23 田名向原遺跡 住居状遺構

流し、東に相模野台地を一望する場所に位置し、石器づくりに使われていた黒曜石は、遠い山岳地帯である中部高地と、太平洋上の神津島系(恩馳島)のものでした。人々は遊動生活を繰り返しながら、動植物などの自然資源を開拓しました。

旧石器時代後半期(21,000年前)の田名向原遺跡(国指定)で、国内最古の建物跡が発見されています。相模川河畔に所在し、建物内で主に中部高地から持ち込まれた黒曜石で槍先形尖頭器(石槍)づくりが集中的に行われ、3,000点以上の石器(県指定)が出土しています。相模川の河川敷に現れる動物を予測し、効率的に狩りを繰り返していました。

15,000年前に縄文土器を用いた縄文時代へと移り変わり、津久井山間部や相模野台地に人々の生活の跡が見られます。10,000年前に地球規模で温暖な気候に移り変わり、市内で遺跡が多く見つかり、縄文時代中期～後期(5,500～3,500年前)には大きな集落が形成されました。勝坂遺跡(国指定)は、集落周辺に豊富な湧水があり、クリの管理栽培やマメ類を意図的に土器へ練り込んだと考えられるマメ圧痕土器(市指定)が発見されるなど、人々は豊かな自然と共生した暮らしを営みました。また、装飾性豊かな縄文土器は勝坂式土器と呼ばれ、代表的な縄文土器の一つです。大日野原遺跡から土偶が装飾された勝坂式土器(市指定)が発見され、甲府盆地から関東への玄関口となる本市域は、中部高地方面の文化の影響を強く受けていたことを示します。縄文時代後期には、寸沢嵐石器時代遺跡(国指定)や川尻石器時代遺跡(国指定)などで、石を多く用いた敷石住居や墓などの構造物が造られました。

稲作文化へと移り変わる弥生時代は、高燥な相模野台地で大規模な水田をつくることは難しかったため、本市域で定住した集落跡は未発見です。一方、津久井山間部では県内で弥生時代初期に位置付けられる弥生土器が、三ヶ木遺跡(県指定考古資料)や中野大沢遺跡(市指定考古資料)などで発見され、丹沢の山間部に展開する同時期の遺跡では、イネのほか、アワやキビなど稲作以外の栽培もしていたことがわかっています。津久井地域においても、小規模ながらも複合的な農耕を営んでいたことでしょう。



図 1-24 大日野原遺跡土偶装飾付土器

2. 古代(古墳時代～平安時代)

勝坂遺跡の段丘崖裾部は湧水地帯となっており、豊富な湧水が有鹿谷の低湿地から鳩川に注ぎ、下流部の海老名耕地（海老名市）を潤します。有鹿谷で、古墳時代を通じて水辺の祭祀が繰り返し行われた勝坂有鹿谷祭祀遺跡が発見されており（4世紀後半～7世紀前半）、小型銅鏡7面や子持勾玉のほか、多量の石製模造品が採集されています（市指定）。勝坂周辺には同時期の古墳や集落はないため、下流の海老名耕地を望む上浜田古墳群（4世紀後半以降）が勝坂有鹿谷祭祀遺跡と関係のある有力な首長墓とされています。勝坂有鹿谷祭祀遺跡は、海老名耕地を開発した人々にとって、水源を祭った神聖な場でした。



図 1-25 勝坂有鹿谷祭祀遺跡 祭祀遺物

畿内で飛鳥文化が華開く古墳時代後期（7世紀）の相模川中下流域は、相模国造の支配領域でした。相模川左岸の当麻耕地を望む台地上に、当麻東原古墳（市指定）や谷原古墳群（1号墳：市指定）の円墳が築かれ、古墳後背地に東原遺跡や田名塩田遺跡群など同時期の集落が発見されています。古墳石室内から鉄製の直刀や馬具の兵庫鎖鐙などの副葬品のほか、金銅装の耳飾り、ガラス玉などの装飾品が出土しました（当麻東原古墳出土品は市指定）。

大陸伝来の仏教や律令制度によって、中央集権国家へと社会が大きく変化した奈良時代（8世紀）は、都を中心に全国を国一郡一郷に行政区分し、国民に租・庸・調といった税を課します。横浜・川崎市域を除く神奈川県域は相模国に含まれ、相模原地域の相模野台地は高座郡、津久井地域は愛甲郡でした。市域西縁の小淵付近で、甲斐国・相模国の国境が争われ、『日本後記』の延暦16（797）年に都から使が遣わされ、両国の境を定めたと記されています。また、和銅7（714）年に「相模国高座郡美濃里」から品物が届けられたことを記す木簡が、奈良の平城京から出土しています。この「美濃里」は相模原地域南部に比定されています。市内の奈良時代の集落遺跡は、新戸釣瓶下遺跡から畿内系土師器坏、田名坂上遺跡から東国では極めて希少な奈良三彩小壺（市指定）が出土するなど、都とのつながりを物語ります。

平安京に都が移された平安時代は、奈良時代と比べて遺跡が多く見つかります。境川上流で、手工業生産に関わる多摩丘陵の開発が進み、特に豊富で良質な粘土をもつ地質環境を背景に、古代瓦や須恵器を生産した南多摩窯跡群（八王子市・町田市）が形成され、相模国・武蔵国へと供給しました。この須恵器生産を担ったのが、多摩丘陵の裾を流れる境川の対岸、相模野台地に展開する相原遺跡群や橋本遺跡、矢掛・久保遺跡などの古代集落の人々でした。矢掛・久保遺跡で須恵器の円面硯や青銅製蛇尾などの帯飾りのほか、仏塔の土製ミ



図 1-26 田名坂上遺跡 奈良三彩小壺

ニチュアである瓦塔や火葬墓の蔵骨器も発見され（市指定）、地方役人の存在や仏教文化の伝来が確認できます。田名半在家遺跡で、唐の雲龍文八花鏡（市指定）の破片（破鏡）が出土しており、古代の山林修行僧の活動を伝えています。



図 1-27 田名半在家遺跡出土雲龍文鏡

3. 中世（鎌倉時代～戦国時代）

律令制に基づく古代国家が崩壊し、各地に武士団が形成されました。平安時代末から鎌倉時代初めに、相模原地域北部から津久井地域にかけて、多摩丘陵を本拠とした横山党と呼ばれる武士団が勢力を築きます。横山党の系図に、藍原氏（相原）、小山氏、野部氏（矢部）、田名氏、小倉氏がおり、その氏名が現在の地名に残ります。

中世の津久井地域は「奥三保」と呼ばれました。元亨3（1323）年の北条貞時13回忌供養に際し、円覚寺（鎌倉市）の法堂建立の材木を奥三保の「鳥屋山」（緑区鳥屋）から伐り出しました。津久井地域は鎌倉幕府執権北条得宗領で、山林資源を抱える重要な役割を果たしていました。

当麻の無量光寺は時宗を開いた一遍ゆかりの地で、二世他阿真教が伽藍を開きました（市指定）。鎌倉時代以降も時の権力者の庇護を受けた根本道場で、南北朝時代から室町時代の宝篋印塔、五輪塔、板碑など多くの中世供養塔が残されています。津久井地域は夢窓国師の開山を伝える光明寺など古刹も多く、中世の仏像彫刻が多く残されています。南北朝時代から室町時代の供養塔は、独自の石造文化を築きます。



図 1-28 無量光寺境内 中世石塔群

室町時代に、戦乱の世へと移り変わりました。磯部城が文明10（1478）年の長尾景春の乱で太田道灌に落とされ、市内が戦渦に巻き込まれました。伊勢宗瑞（北条早雲）を初代とする小田原北条氏が関東八州へと領国を拡大させていく中、武蔵国への起点となったのが無量光寺の門前町である当麻宿でした。相模川の渡河点として交通の要衝で、関所も置かれました。また、津久井城は城主内藤氏が5代にわたり治めました。甲斐国との境目の城として重要な役割を担いました。相模原地域は相模国の東郡に含まれ、鎌倉の玉縄城と八王子油井領の支配下におかれました。



図 1-29 津久井城跡（城山空撮）

4. 近世(江戸時代)

天正18(1590)年7月に豊臣秀吉が小田原北条氏の小田原城を開城させ、天下統一を果たしました。徳川家康は秀吉の命により関東に支配替えとなり、翌8月に江戸に入りました。これにより本市域は徳川家の所領となり、以後、江戸時代末まで相模原地域17か村、津久井地域27か村2宿に、幕府直轄領や下野国烏山藩領、荻野山中藩領、旗本領など領主が入り混じります。徳川入国後、東郡の一部を拝領した内藤清成は、新戸に政務を執り行う陣屋(市登録史跡)を設けました。天正19(1591)年に当麻郷で早速に検地が行われ、検地の野帳(下書)が残されています(市指定)。17世紀前半の津久井地域で、津久井城主内藤氏の家臣であった守屋佐太夫行広が代官に登用されます。津久井城があった城山の麓に陣屋が置かれ、発掘調査によって陣屋跡を示す礎石建物跡などが発見されています。代官守屋氏は津久井領全域のほか、高座郡、愛甲郡、足柄上郡など本市域を超えて支配し、湯河原町の五所神社本殿(県指定)を再建したほか、川尻村において久保沢市や原宿市の開設を支援しました。

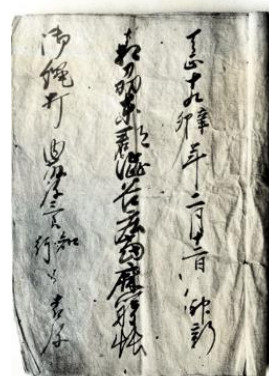


図 1-30 当麻郷野帳

また、徳川幕府は五街道を整備して宿場を設け、伝馬制度を敷きました。江戸日本橋から信濃国下諏訪宿を結ぶ甲州道中(甲州街道)が津久井地域を通り、小原宿、与瀬宿、吉野宿、関野宿の4宿が設けられ、一里塚が街道沿いに3か所築かれました。参勤交代による往来時に大名が宿泊する本陣が、小原宿に県内唯一現存します(県指定)。その他、道志道の青野原村や津久井道の鼠坂に関所が設けられていました。



図 1-31 県指定重要文化財小原宿本陣

中世以来、広大な原野である「相模野」は萱、芝、落葉などを採取する秣場であったことが無量光寺文書(市指定)からわかります。近世も村共有の入会地であったことが相模野周辺三十六ヵ村入会絵図(市指定)などから知れます。この相模野は、江戸時代の17世紀中頃から、境川沿いの村々を中心に「新田開発」(畑地開墾や植林)が進められました。19世紀中頃に小山村名主の原清兵衛が主導した「清兵衛新田」は、相模国で江戸時代最後にして最大の新田開発で、清新の氷川神社に徳川慶喜の揮毫で開墾記念碑(市登録)が建立されています。

津久井地域の豊かな山林は、17世紀後半から江戸幕府が直轄して山林資源の保護と恒久的財源化を図るため、「御林」が多く設定されました。伊豆国韮山の代官江川太郎左衛門英龍の時代に、城山北麓に植林された城山御林は、弘化5(1848)から嘉永3(1850)年にヒノキの苗木が植林され、「江川ヒノキ」(市登録)の名で今日まで守り育まれています。



図 1-32 相模野周辺三十六ヵ村入会絵図

5. 近代(明治時代～昭和20年)

幕末に横浜が開港されると、生糸生産のため養蚕が盛んになります。上溝に繭や生糸の取引を中心とした上溝市場が明治3（1870）年に開設され、大変な賑わいを見せました。大島に明治19（1886）年に製糸業者「^{ぜんしんしゃ}漸進社」が結成され、生糸の生産と共同出荷で業績を伸ばし、最盛期には製糸業で全国の四大会社に数えられました。明治41（1908）年に生糸輸送を促進するため、横浜鉄道（横浜線）が開通し、橋本と淵野辺に駅が開設されました。橋本駅は地域の努力により駅開設に結び付け、今日の都市発展の礎となっています。

近代は国家主導で西洋技術が取り込まれ、本市域は近代水道や近代測量と深く関わっていきます。明治20（1887）年に完成した日本初の近代水道である横浜水道は、その水源を津久井地域の旧三井村に流れる相模川に求め、横浜まで鑄鉄管により導水したものです。明治30（1897）年の第1回拡張工事で、三井から青山に取水所を移し、青山に現在も取水口と沈殿池が残されています（いずれも国登録）。明治43（1910）年に始まる第2回拡張工事では、青山の^{あびこ}鮎子に取水口を移し、青山^{せいどう}隧道、城山^{しろやま}隧道、川尻^{かわしり}隧道など、レンガ積みの隧道（トンネル）が現在も残されています。



図 1-33 横浜水道「トロツコ道」
（写真 宮内庁所蔵）

一方で、広く平坦な地形で見通しの良い相模野台地は、日本で初めて近代測量の基線「相模野基線」が設けられ、その北端点（市指定）が麻溝台に設置されました。明治15（1882）年の測量開始から三角測量を繰り返し、大正14年（1925）に五万分の一の全国地形図が完成しました。相模野基線北端点は近代測量発祥の地です。

未開発で広大な土地が広がる相模野台地に、昭和12（1937）年の陸軍士官学校と練兵場が移転してきます。これをきっかけに、臨時東京第三陸軍病院、陸軍造兵廠東京工廠相模兵器製造所（後の相模陸軍造兵廠）、電信第一聯隊、陸軍通信学校などの軍関係施設が昭和18（1943）年までに相次いで設置されます。昭和14（1939）年から、神奈川県事業として「相模原都市建設区画整理事業」が開始され、陸軍造兵廠を中心に放射・環状の道路網による都市計画が進められます。これは「相模原軍都計画」と呼ばれ、当時の都市建設計画の中では最大規模のものでした。現在にみる都市発展、まちづくりがこの軍都計画によってもたらされていたのです。一方、津久井地域では都市部への本土空襲に備え、敵機襲来をいち早く察知する防空監視哨が設置されました。現在、中野の高台に一間四方の鉄筋コンクリート造建造物の中野監視哨、青根の高台にマウンド状の盛土内に円形の聴音壕の遺構が残る青根監視哨など、戦争の歴史を語る戦争遺産が残されています。



図 1-34 陸軍士官学校
相武台碑と大講堂

6. 現 代

敗戦後の窮乏する食糧事情を打開するため、神奈川県は戦前から進めていた「相模川河水統制事業」を推進し、広大な相模野台地へ畑地灌漑用水の整備に取りかかります。多目的ダムによる水系一貫の総合的河川開発で、神奈川県は昭和 13（1938）年に決定し、相模ダム・沼本ダムを築いて相模川の治水と横浜市水道、川崎市工業用水、相模川水力発電、相模原開田開発（戦後に畑地灌漑事業に変更）に係る水利事業として、昭和 15（1940）年に着手されました。しかし、戦争の激化で労力不足と資材窮乏により中断しました。戦後に事業は再開され、昭和 22（1947）年に相模湖相模ダムが完成して相模発電所が稼働し、わが国の戦後復興の先駆けとして注目されました。翌昭和 23（1948）年に『県営相模原開発畑地灌漑事業計画』が策定され、日本初の大規模な畑地灌漑事業が実施されました。昭和 24 年（1949）年から虹吹分水池（陽光台）を含む東西幹線用水路工事に着手し、段階的に灌漑が進められました。なお、終戦直後の食糧難に対し、陸軍士官学校練兵場跡などの広大な旧軍用地を擁する相模野台地は、戦災者や海外からの引揚者、復員者などの就業と食糧の確保を図る格好の地として、政策的にいくつもの開拓団が組織され、入植して相模野の原野を開拓しました。

河水統制事業はその後も増強され、昭和 30（1955）年に道志川の奥相模湖道志ダム、昭和 40（1965）年に津久井湖城山ダムと城山湖本沢ダムが完成し、津久井地域は県内の重要な水源地域として存在感を増しました。

昭和 14（1939）年から進められた相模原都市建設区画整理事業も、河水統制事業同様に戦時中の工事中断を余儀なくされましたが、昭和 25（1950）年に一応の完成をみました。この都市整備基盤は、旧相模原市が昭和 33（1958）年に首都圏整備法（昭和 31 年法律第 83 号）に基づく市街地開発区域の第一号に指定され、今日の都市発展の礎となりました。相前後して、本市は昭和 30（1955）年に所謂「工場誘致条例」を施行し、工業団地を整備していきます。戦後、旧陸軍施設は米軍基地として接收され、その後の基地返還運動の展開、未利用地や返還後の跡地利用における学校、公園、図書館、博物館の整備など、市民のためのまちづくりが進められました。都市化が進む相模原地域は、昭和 29（1954）年の市制施行後、人口は増加の一途を辿りました。人口 60 万人を越えて平成 15（2003）年に中核市へ移行し、平成 18・19（2006・2007）年に旧津久井 4 町と合併して人口 70 万人を超え、平成 22（2010）年に指定都市へ移行しました。今なお、リニア中央新幹線の整備など、首都圏の近郊都市としての相模原地域の発展と自然豊かな津久井地域とが融合したまちづくりを進めています。



図 1-35 相模湖相模ダムと相模発電所



図 1-36 虹吹分水池跡

7. 災害史

近年、全国では地震や風水害などの自然災害により、文化財への被害も多くみられます。本市でも、令和元（2019）年の台風により甚大な被害を受けました。将来想定される災害から文化財を守るためにも、これまでの災害の歴史を概観しておきます。

平安時代の歴史書に災害に関する記事が幾つか確認できます。『日本記略』の延暦 21（802）年に富士山が噴火し、相模国が被災しました。『類聚国史』の弘仁 9（818）年に、相模・武蔵など六国で大地震が発生し、『日本三代実録』の元慶 2（878）年に関東の大地震が相模国・武蔵国に大きな被害もたらしたと記載されています。国指定史跡川尻石器時代遺跡で地割れの痕跡が検出され、付近で発見された竪穴住居跡（9 世紀前半）は、竪穴に掘られた壁が崩落した状況で検出されており、地震被害を受けたとみられます。

相模川の洪水被害の記録は、天正 3（1575）年に発給された北条氏朱印状が最も古いものです。戦国大名の北条氏政が、相模川の洪水の救済措置として田名に対し、税の半分免除を認めたものです。相模川沿いの村々に大きな洪水被害があったことがわかります。近世の洪水被害は、元禄 12（1699）年の上・下川尻村における洪水と川崩れ、安政 6（1859）年の荒川（現津久井湖湖底）での相模川の洪水による八幡宮の神輿の流失、万延元（1860）年の相模川の洪水による田名の烏山用水（市登録）と水田の被害などがあります。明治時代も相模川の洪水は度重なり、明治 11（1878）年の相模川・鳩川・谷津川の洪水の記録は、当麻、新戸、下溝、久保沢で確認されます。当麻宿は明治 40（1907）年の洪水被害の翌年、洪水を免れた島状の微高地に、日枝神社を創建しています。明治 43（1910）年は低気圧の前線活動と 2 つの台風の影響により、東日本全体で未曾有の大災害を招いています。

その他風水害として、明暦 2（1656）年の暴風で川尻八幡神社の拝殿が倒壊したほか、元禄 12（1699）年に暴風で与瀬宿と小原宿で家屋が倒壊し、復旧のために代官所から金 19 両 2 分の借入れをした記事がみられます。天明 8（1788）年の大雨で、千木良村で山崩れが発生し、名主の土地二町八畝歩余が流失したため、年貢の免除願いが出されました。

近世以降の地震被害は、元禄 16（1703）年に相模湾房総沖を震源とした推定マグニチュード 8.2 の大地震が発生し、当麻村、下溝村、磯部村、新戸村などで 82 軒が倒壊し、道志川など津久井地域の 5 河川が「砂川」となって川が濁り、鮎が獲れずに鮎運上の免除願いが出されています。4 年後の宝永 4（1707）年 10 月 4 日に大地震が発生し、11 月 23 日に富士山中腹で大噴火が起きました。噴火は 12 月 9 日まで 16 日間続き、降



図 1-37 地震で壁が崩れた古代住居跡
(国指定史跡川尻石器時代遺跡)



図 1-38 当麻宿の日枝神社

り続く火山灰により農作物に大被害が及びました。上・下川尻村、相原村、橋本村、小山村と多摩郡の18か村は連名で被害を報告しており、田畑に一寸五分（4.5 cm）程火山灰が降り積もったと記録されています。下川尻村の藤沢領では、翌年、田の約14%で年貢が免除されました。上溝久保の浅間神社は富士塚といわれ、火山灰を集めて塚とし、静岡の浅間神社の札をお宮に祀ったといわれています。富士塚は津久井地域の根小屋の金原にも残されています。



図 1-39 上溝久保の浅間神社

大正12（1923）年9月1日に発生した関東大震災では、相模川沿岸の新磯^{あさみぞ}、麻溝、田名、大沢などの段丘上で、道路の亀裂や崖崩れが甚だしく、特に下溝の段丘崖は200間（約360m）が崩壊しました。津久井地域では死者23名の犠牲が出ており、特に鳥屋の馬^{いし}石（「地震峠」と呼ばれる）と千木良の赤馬^{あこうま}で山林崩壊（山津波）が生じ、甚大な被害をもたらしました。下溝の十二天神社や鳥屋の地震峠など市内16か所に、関連の慰霊碑や復興記念碑が建立されています。



図 1-40 根小屋の富士塚

その他、自然災害ではありませんが、集落全体に延焼する火災が発生しています。明治28（1895）年の小原宿、翌明治29（1896）年の吉野宿、明治30（1897）年の日連村杉集落、明治33（1900）年の中野集落、昭和22（1947）年の与瀬宿で大火があり、小原宿の大火では江戸時代の本陣建物は延焼を免れましたが、吉野宿では本陣や旅籠のふじや、与瀬宿では本陣が焼失しました。



図 1-41 地震峠

8. ゆかりのある人物

市域での関わりをもち、歴史上登場する人物には、中世では当麻太郎、淵辺義博、内藤左近将監などの武将、当麻三人衆、江成筑後守などの名主、一遍上人、他阿真教、夢窓国師などの僧侶、近世では内藤清成、青山忠成、守屋佐太夫、江川英龍などの領主・代官、徳本上人、南山古梁などの僧侶、相模屋助右衛門などの商人、原清兵衛、小泉茂兵衛などの名主のほか、文化人や医師などが活躍しています。近代では、又野に生まれて青年期を過ごし、後に「憲政の神」、「議会政治の父」と称された政治家の尾崎行雄のほか、地域では明治から昭和にかけて78年間もの日々の出来事をつづった『相澤日記』（市指定歴史資料）の相澤菊太郎氏がいます。こうした歴史的人物に関連した地域遺産も多く残されており、特徴的な歴史文化を形成しています。